

公募助成「腎不全病態研究助成」研究サマリー

研究名	二次性副甲状腺機能亢進症の進行機序の解明 ～シナカルセトによる副甲状腺の mass reduction に関する研究
所属機関	東海大学医学部附属大磯病院 腎糖尿病内科
氏名	巽 亮子
<p>2008年よりCKD-MBDの治療にシナカルセトが使用可能となってから、副甲状腺摘出術の件数は減少を続けている。しかしながら、シナカルセト投与下にも副甲状腺機能亢進症のコントロールがつかず、手術適応となる症例が存在する。シナカルセトによる副甲状腺の変化は、腫大腺の縮小、血流低下、嚢胞性変化が報告されている。また、副甲状腺摘出術の術中所見からは、不均一な副甲状腺の腫大例が多く、follicular degeneration、cystic change、出血性梗塞、線維化などがシナカルセトによる変化として挙げられている。シナカルセトによる組織学的変化については明らかでないところが多く、その変化を検討すべく、今回の研究を行うものである。</p> <p>当大学関連施設において副甲状腺摘出術を施行する二次性副甲状腺機能亢進症症例で、患者に同意が得られた症例を対象とし、摘出した副甲状腺をホルマリン固定パラフィン包埋した副甲状腺組織よりパラフィン切片を作成する。これらについて、特に、嚢胞形成と繊維性被膜の形成、副甲状腺細胞の細胞死と細胞縮小について観察し、シナカルセト投与との関連を検討した。</p> <p>シナカルセト投与下に嚢胞化した副甲状腺についての病理所見は以下の通りである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・甲状腺内に結節状に増殖し癒着した腺は、一部に硝子化癒痕組織を認め辺縁で甲状腺の境界が不明瞭だった。 ・結節内に散在する限局的な壊死層や硝子化癒痕、空洞形成と空洞内の漿液貯留を認めた。結節内の空洞に貯留した漿液により遠心性に空洞が拡大し、副甲状腺細胞が縮小する可能性が示唆された。 ・嚢胞内腔は漿液成分に満たされており、副甲状腺細胞は嚢胞壁内側に付着して残存していた。嚢胞壁は繊維化し、内側に付着した副甲状腺細胞が繊維性組織に置換されることを示唆する所見を得た。嚢胞壁は繊維性組織で一部が石灰化し、内側に副甲状腺細胞を認めた。一部の副甲状腺細胞は内腔側に新たな繊維性変化を認めた。副甲状腺細胞は一部繊維性組織の中にも認められた。 <p>これらの変化のすべてがシナカルセトの作用に起因するものであるかは不確定であり、さらに症例を重ねて検討することが必要である。</p>	